

第一章 小説と映画、それぞれの凄絶

『82年生まれ、キム・ジヨン』

——憑依する「恨」、フェミニズムの時差と逆転、

母は清溪川チヨンケチヨンで働いていた

上書きされていく風景

ソウルで暮らし始めたのは1990年のことだ。その頃に知り合った日本の友人から「最近、東京の映画館で『はちどり』という映画を見て、あの頃のことを思い出した」というメールをもらった。映画の舞台は1994年のソウル。たしかに、高層ビルが立ち並ぶ今のきらびやかな韓国とは、街の色が違う、人々の歩く速度が違う。

あの頃、私は延世大学ヨンセで働いていた。在学生には映画『パラサイト 半地下の家族』（2

019年)でアカデミー賞に輝いたポン・ジュノ監督がいた。個人的な接点はなかったが、授賞式の彼を見ていたら懐かしい気持ちになった。ダブダブのズボンにメガネをかけて、「イケてなかった」当時の男子学生たち。今のK-POPスターたちのキラキラ感とはまったくの別世界、でも気さくでいい兄ちゃんたち、ポン・ジュノ監督みたいな風貌の学生がたくさんいた。

韓国の変化はとても激しく、風景はどんどん上書きされていく。過去の記憶は小説に、映画に、ドラマに、一生懸命再現されている。そうしないと、つながりを見失ってしまうから。最近、公開された映画『82年生まれ、キム・ジヨン』(キム・ドヨン監督)もそんな過去の風景を手繰り寄せ、現在につながる物語だ。祖母の人生、母の人生、私の人生、そんな女たちの物語。

原作小説『82年生まれ、キム・ジヨン』(チヨ・ナムジュ著/斎藤真理子訳、筑摩書房、2018年)は、韓国で2016年の秋に出版され、その3年後の2019年秋に映画が公開された。縁あって、その日本語版の解説を書かせてもらったおかげで、小説はかなり何度も読み込み、映画もまた韓国と日本で2回見た。まずは、この『82年生まれ、キム・ジヨン』という作品について、映画と原作小説の両者の対比も加えながら、考えてみたいと

思う。

キム・ジヨン(チュンク)はなぜ秋夕(チュソンク)の日に憑依したか？

キム・ジヨン氏は今年で三十三歳になる。三年前に結婚し、去年、女の子を出産した。出産を機に退職し、夫は帰宅時間が遅く、実家も頼れないため一人で子育てをしている。

キム・ジヨン氏に初めて異常な症状が見られたのは九月八日のことだった。

突然、自分の母親が憑依したような身振りと言調で振る舞い始めるが、夫は冗談だと思いい、あまり気にしない。(中略)

そして秋夕の連休、夫の実家へ行ったとき、事件は起きた。(筑摩書房ホームページ)

映画版は、この「秋夕の事件」の場面からスタートする。

秋夕というのは旧暦8月15日の中秋節のことだ。韓国ではこの日が旧正月とともに1年で最も重要な「名節」^{ミヨソヨル}であり、通常はこの日と前後の3日間が連休となる。人々は1日かけて帰省し、先祖と家族のための料理を作り、親族が集まって儀式や食事をし、さらに1日かけて家に戻る。とても忙しい。

2020年の秋夕は他の祝日や土日が重なって5連休となった。それはラッキー、しかし新型コロナウイルス感染症の流行も重なった。政府を代表して国務総理が、沈痛な面持ちで国民に訴えかけた。

「チュソクの帰省はなるべく自粛願いたい」

その瞬間、心の中で「よっしゃ！」と喝采したのは「全国の妻たち」だった。まあ全員ではないだろうが、私の友人たちはそんな感じだった。

最近は簡略化されたとはいえ、「名節に先祖を祀る行事」^{まつ}は韓国の人々にとって重要であり、しかもそこは男性中心の明確な儒教世界である。女性は裏方、ひたすら飯炊き。映画でもキム・ジヨン氏はずっと台所に立ち続け、夫がそれを気にしてチラ見していた。

「でも、立っているだけいいじゃん。私なんか毎回しゃがんだままで、ずっとチヂミを焼かされたんだから」

というように、韓国の友人たちはこの作品に結構辛口であるが、そこらへんのドロドロ
ッとした話は後にまとめる。

いずれにしろ女性の負担が大きいことから、「名節シンドローム」とか「名節離婚」と
いう言葉まで生まれたほどだ。キム・ジヨン氏が事件を起こしたのは、まさに「その日」
だった。

そのときだ。ジヨン氏の頬がさーっと赤くなったと思うと突然、まるでおばあさん
のような、情のこもった表情になった。目もうるんでいるようだ。

（『82年生まれ、キム・ジヨン』）

彼女は「憑依」されたのである。まるで何かに憑つかれたように、いつもと違う口調で不
思議な言葉を喋しゃべり始めた。

韓国における「憑依」とは

日本だと何やらオカルトっぽく感じるかもしれないが、韓国で暮らしていると、「憑依」

はわりと身近である。実際に憑依（降霊）を経験して、その職業（巫堂^{ムダグ}）についた知り合いもいる。日本でも恐山^{おそれざん}をはじめ、各地方に死者を口寄せする霊媒師やシャーマンはいらと思うが、韓国はその人口が多いのだろう、日常的にもそんなシーンに出会うことがある。また韓国にはいろいろな宗教があるが、いずれもシャーマニズムの影響が強いと言われている。

今も印象に残っているのは2010年頃、ソウル市内のお寺の一角で遭遇した、男性なのに女性の着物を次から次に着替えながら踊るムーダンだ。その前には男が一人ひざまずき、涙を流しながらずっと謝っていた。ふたりの会話を聞きながら、そのムーダンには彼の亡くなったお母さんが憑依しているのがわかった。

「親不孝な息子さんだったんでしょね。亡くなったお母さんはさぞかしハンの多い人生だったんでしょ」

一緒にいた友人の説明はスタンダードだった。「ハン」は漢字では「恨」と書くが、日本語の恨みという意味ではなく「無念さ」のような感情である。無念さを抱えたまま亡くなった人が、ムーダンに憑依して生前の悔しさを吐露する。ムーダンは死者の言葉を語りながら鳴り物を叩いて踊り狂い、そうして死者だけでなく、生者の魂も鎮めていく。

ところがキム・ジョン氏の場合は、死者ではなく先輩や母親など、現実にいる人々に憑依される。これは韓国でいうところの伝統的な憑依、降霊ではない。小説ではわかりにくかったが、映画になって視覚化されてからはキム・ジョン氏の表情なども加わり、その印象はさらに強まった。たしかに異変ではあるが、霊的なものを感じない。

ただ映画の中で1ヶ所だけ、ゾクツと震えがくる瞬間があった。キム・ジョン氏に祖母が憑依し、その娘（つまりキム・ジョン氏の母オ・ミスク氏）に語りかける場面だ。それにはなく、映画で追加された部分だった。このシーンのすさまじさは、おそらく役者たち、特に母親役のキム・ミギョンの演技力によるものだと思う。

彼女はそこに本来の憑依、自分の母親の「恨」を見たのだ。